

## 活動報告：ミュージックチャイルド

### 1. 「ミュージックチャイルド」について

広島文化学園大学・短期大学 子ども・子育て支援センターでは、平成22年度より特別な支援を要する幼児・小学生を対象とした音楽療法「ミュージックチャイルド」を、非常勤講師とともにやってきた。23年度から「音楽療法実習Ⅰ」の実習先として、音楽学科の2年生（音楽療法士資格取得希望者）「音楽療法実習Ⅰ」履修学生が、非常勤講師の行う音楽療法セッションを見学している。また、27年度からは、音楽療法を受けたい児童を積極的に受け入れているが、その時の助手を、音楽療法資格取得希望者に任せ、本格的な学外実習施設として機能している。

「ミュージックチャイルド」の目的は、音楽をツールとし、意図的・計画的に子どもの発達を支援することである。対象児の行動の変容や発達を促進するとともに、対象児の表現力の向上により、特に保護者が子どもの変化を喜び、より望ましい親子の愛着形成が成果として見られている。

### 2. 29年度の実践報告

「ミュージックチャイルド」で行う音楽療法は、インタビュー面接をはじめとする、アセスメント、目標設定、実施計画の作成、セッション、保護者とのカンファレンスの流れで実施される。28年度は、本学において資格を取得した卒業生、静岡千聖・植松貴子（27年度卒業）に主なセラピストを実施してもらった。3年生に在学している学生をカメラ助手とし、動画の記録を実施し、その内容を文字起こしした。その動画と文字起こしした記録を参考にしながら、筆者がスーパーバイザーを務め、定期的にスーパービジョンを実施し、セッションがより効果的に進むように取り計らった。また、セッションによっては、音楽療法士の資格取得希望者の中から、児童領域により熱心な学生を助手とした。

セッションの実施回数は、対象児童Aちゃん：セッション回数は29年度後期4回と、30年度の前期5回にまたがる結果となった。月別の実施回数は12月2回、2月1回、3月2回、4月2回、5月1回、6月1回、であった。

対象児童の年齢は、9歳の女児で、対象児についている診断名は、広汎性発達障害・軽度であった。

### 3. 指導者の立場より

今年度は、大学を卒業して、『音楽療法士』として活躍している卒業生に積極的にセッションを展開してもらった。筆者は、このセッションに関して、スーパーバイザーという立場に徹し、毎回のセッション内容に関しては静観し、定期的にスーパービジョンの時間に指導した。講師を勤めた二人は本学で音楽療法士になるための講義をしっかり受け、授業の中でも計画・実践・振り返り（スーパービジョンにあたる）を繰り返し、多くの実践を経験してきているので、セッションを任せることに関しては、指導者として何の不安もなかった。定期的実施するスーパービジョンの中で、当事者ではない客観的な立場、また、音楽療法士として先輩の立場からの『気づき』を彼女たちに伝え、そのアドバイスを次回からのセッションに活かしてもらう方法を実施した。実際、自己表現がなかなか難しかったAちゃんが、9回のセッションを通して、想像力豊かに、そして自由に自己を表現できるようになった。同時に、学校でも人に気持ちを伝えることができるようになったり、お友達への気遣いを見せるように変化していった。もちろん、Aちゃんがこのように成長したことは、学校生活・家庭生活も大きく影響しており、決してミュージックチャイルドによる効果だけとはいえないが、表現方法を習得していったことはAちゃんの変化の一助になったと言えるのではないかと考える。学校行事やAちゃんの体調から、コンスタントにセッションは展開されなかったが、音楽療法の効果は見られたのではないと思う。

### 4. セラピスト(本学卒業生の音楽療法士)の感想

筆者がスーパーバイザーを務め、スーパービジョンを受け、セッションを展開していったことで、①セッションを実施していると、主観的になりがちだが、スーパーバイザーからの客観的な指摘により、軌道修正することができた。②一緒にビデオをみて振り返ったことで、新しい発見があった。③音楽療法士としてのプライドにより、

卒業して時間が経つと、自分たちがかなりの経験者という気持ちになりそうだったが、スーパービジョンを受けることで、常に初心に戻ることができた、と言う感想をもらえた。

## 5. 改善点と将来構想

29年度は卒業生を育てるという講師体制でミュージックチャイルドが展開した。セッションの組み立て方や対象児とのかかわり方など、様々

な問題点を考慮しながら慎重に進め、それぞれのセッションで音楽療法の効果を実証することができたと思われる。

今後も引き続き多くの対象児と、より丁寧なセッションを展開していきたいと考えており、ミュージックチャイルドで実施する音楽療法の実践を通して、本校が児童領域の音楽療法の拠点となるべく、研鑽を積みみたいと考える。

(文責：学外学部 音楽学科 和田 玲子)



写真1 始まりの歌を歌っているところ



写真3 ドラムを好きなように並べて、友達を表現しているところ



写真2 エーデルワイスの曲に合わせて、布で表現しているところ